

最晩年のポール・ヴァレリー：
ヴォルテールを鏡として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010042

最晩年のポール・ヴァレリー ——ヴォルテールを鏡として——

安 永 愛

はじめに

普仏戦争終戦直後の1871年に生まれ1945年に没したポール・ヴァレリーの生涯は、まさしくフランス第三共和政の時代に重なる。フランス文学史を振り返るならば、1871年という年は、マルセル・ブルーストが生を享けた年としても記憶されるが、喘息を抱え、病弱であったブルーストが1922年に没したのに対し、ヴァレリーは第二次世界大戦の推移をほぼ見届け（7月20日に没しているので、人類初の核兵器の使用とその惨禍には接していない）、この世を去った。

ポール・ヴァレリー研究の碩学、パリ第四大学（ソルボンヌ大学）のミシェル・ジャルティは、2016年10月に東北大学にて開催された日本フランス語フランス文学会での講演「ヴァレリーとその時代」« Paul Valéry et son temps »において、ヴァレリーの生（ことに文学上の生）について、一つの見取り図を示してみせた。氏によれば、ボードレールやマラルメらを筆頭とする象徴派の美学が生きていた19世紀末は、ヴァレリーにとって親和性のある時代であったが、20世紀に入り、モダニズムやシュールレアリスムの潮流が時代を風靡するようになると、時代との違和感、不和を痛感し、新しさの価値に冷淡となり、一種の古典主義者としての道を歩んだというものである。

ヴァレリーの古典主義者としての側面についてはしばしば言及されるが、ヴァレリーは決して時代から超然としていたわけではない。ことに1917年、詩人としての二十年の沈黙を破り執筆された長編詩『若きパルク』の成功によって一躍文壇の寵児となり、フランスのみならず広くヨーロッパ全土、さらには南米にまで文名を馳せるようになり、一種の「文化のコメディアン」としての役割を演ずるようになったヴァレリーは、公人としての責任感も伴い、同時代の知的公衆の期待に応え、懸命に時代と対峙しようとしていた。ヴァレリーの晩年は、狭義の文学史の枠組みを超えた各界の要人たちとの交友に彩られている。

驚くべきエネルギーで生きていたヴァレリーだったが、約2ヶ月の病臥の後、1945年7月20日、73歳にして没する。

最晩年のヴァレリーの生活と残されたテキストを振り返ると、18世紀フランスの啓蒙思想家ヴォルテール（1694–1778）の姿が大きく重なって見えてくる。本稿では、最晩年のヴァレリーのありように目を向け、彼がヴォルテールに傾倒したことの意味を探るとともに、ヴァレリーが同時代のフランスの中で果たした役割について考察を深めることとしたい。

1. ヴォルテールとの遅ればせの出会い

二十代の出会い以来、ヴァレリーの親友であったアンドレ・ジッド（1869–1951）は、死の床にあったヴァレリーを毎日のように見舞い、ヴァレリー逝去の7月20日もヴァレリー宅を訪れたのだったが、ジッドによれば、ヴァレリーが最後に手にしていた書物は、ヴォルテールの『風俗論』*Essai sur les mœurs et l'esprit des nations*（1756）であった¹。胃の病に苦しみ、その年の5月の末から病床にあったヴァレリーが、自分の死期を悟っていたかどうか、恢復の望みをつないでいたか否かについては定かではない。しかし己れの身体の衰弱が、以前とは次元を異にするものであることを感じていなかったはずはないであろう²。そのような状況の中で、枕頭にヴォルテールの『風俗論』が置かれていたことの意味について考えてみたい。

ヴァレリーの私的手記である『カイエ』も含め、ヴァレリーの書き残したもののなかでヴォルテールに言及されているものは、ほぼ最晩年に集中している。管見するところで、ヴァレリーによるヴォルテールの言及の最も早いものは1910年の『カイエ』の中にあり、「ヴォルテールは、文芸批評家としては最も「実証的」で最も技術的な知性の持ち主であり、最も大胆である」³と記されている。また、1915年の『カイエ』には「最も人間的なものは、最も個人的でないものである」との言葉とともにヴォルテールの名が記されており⁴、1917年の『カイエ』には「詩とはまさに美しい細部によってのみ作られる、とのヴォルテールのすばらしい言葉が心底理解できる」⁵との短い記述が見られる。1920年代、1930

¹ Michel Jarrety, *Paul Valéry*, Fayard, 2008, p.1208.

² 1945年5月、ヴァレリーは詩学教授を務めていたコレージュ・ド・フランスにて、聴衆に挨拶し、老齢と体調を理由に退任する旨を伝えている。少なくとも講座に戻ることはないことをヴァレリーは覚悟していた。

³ Paul Valéry, *Cahiers II*, Gallimard, 1974, p.1157.

⁴ *Ibid.*, p.1164.

⁵ *Ibid.*, p.687.

年代にもヴォルテールに関する肯定的な短いコメントが数回見られるが、まとまった記述は見出すことはできない。晩年に至って、ようやくまとまった記述が見られるようになるのである。1942年、70代を迎えたヴァレリーは、以下のよう書き記している。

私はこの一ヶ月というもの、ヴォルテールに陶酔している。

これは、重要人物だ。彼は何も信じていない—あるいは何も信じないことを信じる頭を持った人間である。そして、そうした態度を民衆に提示している。こうして思想の自由というものに適した大衆が生じた。自由はもはや留保されるものではなくなったのである。⁶

「陶酔している」Je me soule de ~という言葉の使用は、分析や批判の力の強いヴァレリーにあっては珍しい。ヴォルテールの著作がヴァレリーに例外的といってよい感銘を与えたものと理解できる。かねてからヴァレリーは書き手としてのヴォルテールに好感を持っていたわけであるが、晩年に至ってヴォルテールに出会い直したと言ってよいだろう。

2. ヴアレリーにとっての他者

このような晩年のヴァレリーのヴォルテールへの傾倒について考えるにあたって、そもそもヴァレリーにとっての「他者」というものがいかなる位置を占めるのかについて、一瞥しておきたい。ヴァレリーは『カイエ』に、自らの人生の節目節目に関わった人物の名前を挙げ「私の人生は他者の作品に他ならない」と述べたり、「自らの偶然にすぎない私」⁷という言葉を残したりしている。ヴァレリーの独特の概念である「純粹自我」« moi pur »のややもするとスタティックなイメージとは裏腹に、事実ヴァレリーは「他者」の介入によって大きく人生を動かされてきている。南仏の地方都市の素朴で夢見がちな文学青年であったヴァレリーが、時代を牽引していた詩人マラルメと連絡をとり、パリに上京するようになったのは、ヴァレリーが在学していたモンペリエ大学の創立六百年記念祭にパリからやってきていたピエール・ルイスとその友人アンドレ・ジッドとの出会いなしには考えられない展開であった。数年のモラトリアムの後、

⁶ *Op.cit.*, Paul Valéry, *Cahiers II*, VI p.687.

⁷ Paul Valéry, *Cahiers t.1*, Gallimard, 1973, p.1448.

陸軍省の職を得たのも作家で同省勤めであったユイスマンスの計らいによるものであったし、画家のマネの義妹でありモデルでもあった女流画家ベルト・モリゾの姪であるジャンニー・ゴビヤールとの結婚も、マラルメの計らいを彼の死後に引き継いだ画家のドガのお膳立てによるものであった。また詩人としての二十年にわたる長い沈黙ののち再び詩作へと回帰していったのも、若い頃の詩を纏めて出版しないか、ともちかけたジッドの勧めに端を発する。再開した詩作が絶大な評価を得て、ヴァレリーが第三共和政フランスの欽定詩人のごとき役割、代表的文人の相貌を獲得することになったのも、他者の介入なしにはありえないことであった。

以上は、「生ける」他者についてであるが、ヴァレリーには自らの知的偶像としていただいていた人物がいる。ランボーしかり、ワグナーしかり、そしてレオナルド・ダ・ヴィンチしかりである。ことにレオナルド・ダ・ヴィンチは、「曖昧なるもの」を断固拒否すると決意し「飽くなき厳密 (Ostinato rigore)」を旨とし知的鍛錬のために日々継続される『カイエ』執筆にあたっの最良の範であった。ヴァレリーはフランスで刊行されたレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿に接し、それが一つの啓示となった。その後、ヴァレリーはそれを超える知的偶像との出会いは果たしていないように思われる。最晩年のヴァレリーのヴォルテールとの出会いは、ダヴィンチとの出会いのインパクトを凌ぐとまでは言えないまでも、ダヴィンチとの出会い後における、突出したインパクトを持った出会いであったと位置づけられる。

そもそもヴァレリーは、『カイエ』執筆を自らの知的・精神的活動の中心に据え、文学のことであれ、芸術のことであれ、社会や政治のことであれ、批評的に記すというよりは、自ら原理に触れ、その原理を言語化するのを身上とするタイプの書き手である。担当したコレージュ・ド・フランスの詩学講義においては、半ば冗談めかしてのことであろうが「私は、調子の悪い時は本を読みます」と述べている。ヴァレリーとヴォルテールとの遅ればせの、しかし例外的といってよい重要性を持つ出会いは、ヴォルテールの生誕二百五十年にあたる1944年の記念祭のために講演を依頼されたこと、また己れの衰弱が進む中、「本を読むこと」が知的活動の中で相対的に大きな位置を占めることになったことによりもたらされたと言える。

3. ドイツ占領下の日々と老いと

ヴァレリーの最晩年は、ドイツ占領下時代からパリ解放へと向かっていく時

期に重なっている。フランスがドイツ占領下に置かれ、フランス中部の温泉保養地に過ぎなかったヴィシーの地にペタンを元帥とする傀儡政権が置かれる中、フランス国内の出版物については、ナチス・ドイツの宣伝局が検閲統制を行い、出版のための紙の支給もその管轄下に置かれることとなる。出版自体が不如意となる中で、ヴァレリーも厳しい選択を迫られた。当時のフランスの作家たちの中には、フランス作家同盟を組織し、レジスタンスの意志を示そうとする者も現れる。ヴァレリーはこうした運動組織から一種のアンガジュマンを期待されたものの、気質として運動といったものに馴染まないこと、また体力的にままならないことから、組織体の運動の中心となることはなかった。しかし、ジッドらを創刊者とし、戦前からフランス同時代の文学の前衛であり最良の文芸が展開されていた雑誌NRF (*Nouvelle revue française*) の編集長に、ナチス寄りの右派作家ドリュ・ラ・ロシェルが就任することに対しては、ヴァレリーはかなりはっきりとしたNonを突きつけている。あからさまな「運動」という形ではないが、自分たちの良心をかけることのできる媒体であったNRFが時局の中でナチス寄りに圧力をかけられることに対しては、このように断固とした意思を示している。作家・編集者たちから、ヴァレリーは「レジスタンス」陣営であると見なされていたとの証言も残っている⁸。

また、このドイツ占領下の時代は、自らの老いを痛感するようになる時期とも重なっている。ヴァレリーの人生には、何人かの女性の影が見られるのだが、1932年にヴァレリーの担当していたコレージュ・ド・フランスの「詩学講義」の受講生として知り合い、最後の愛人となったジャン・ヴォワリエ（1903－1996）に、ヴァレリーは自らの衰えについてしばしば語るようになる。ヴォワリエに当てたヴァレリーの書簡の文章を以下に引用しよう。

私の朝はもう以前の朝ではありません。明敏さと豊穡さとのせいで、時に殆ど苦しい思いまでした、あの水晶のような朝ではありません。日ごとの日没は、そのまま私の転落です。何か硬質で不動のものが頭の中にあると

⁸ ヴアレリー自身は、1945年の覚書に、「私は大してレジスタンス活動をしたわけではなかった。アカデミー（フランセーズ）では少々レジスタンスした。」と書いている。ヴァレリーなりの含羞と皮肉が籠っている言葉であると考えられる。アカデミー・フランセーズでのレジスタンスとは、1925年の自らの就任演説の際に、通例なら言及するはずの前任者の名（アナトール・フランス）を挙げない形でアナトール・フランスへの軽視の姿勢を示して見せたり、パリ解放後に、新しいアカデミシャンを就任させるにあたって、従来の慣習を排した思い切った方法をとったりしたことを指すものであろうと考えられる。「Je n'ai pas fait beaucoup de Résistance. Un peu à l'Académie » (Note sur 1945, B.N.F.non coté).

いう耐えがたい印象をとときどき抱きます。⁹

私は脂の塗られた頂上にいるようで、眠りとも夢ともつかないものの中に一瞬ごとにくすり落ちていく。それは、そうと感じられないほどの落下だ。息切れのする労働。三歩歩いては疲れて立ち止まり、ベンチに倒れこむ人のよう。私の精神はそんなふうだ。¹⁰

私は崩壊し、荒廃してしまった。もはや自らの虚無の重みしか感じられない丈の高い折れた茎のイメージ。¹¹

「文化のコメディアン」、フランスひいてはヨーロッパを代表する偉大なる詩人となっていたヴァレリーだったが、上記書簡に見られるとおり、三十歳も離れた若き愛人の前に自らの弱さを無防備にさらけ出している。ヴァレリーのヴォワリエ宛書簡は多数残されており、公人としての役割とのコントロール・バランスを取るかのように、ヴォワリエへのなりふり構わぬ心情の吐露が書簡の端々に認められる。

1944年8月、ヴァレリーはパリ解放を祝うパレードを、再興なった新聞社であるフィガロ社のバルコニーから見物し、その喜びを皆と共有した。しかし、年若い愛人であるヴォワリエとの関係は、次第に疎遠なものになっていく。1945年4月1日、ヴォワリエはロベール・ドノエルとの結婚をヴァレリーに告げた。結婚によりヴァレリーとの交流がより豊かなものになるとの可能性を示し、ヴォワリエは晴れ晴れとした表情を見せもした。しかし、ヴァレリーはそのとおりには捉えられず、ヴォワリエにからかわれたのではないかとの思いに突如見舞われた。ヴォワリエの結婚報告にショックを受けたヴァレリーは、帰路の記憶も飛ぶほどであった。そして、ヴォワリエの報告がヴァレリーの死の引き金となったかのように、事態は推移していくことになるのである。

4. ヴォルテール生誕二百五十周年祭記念講演とパリ解放後の「詩学講義」

最晩年のヴァレリーの人生は、およそ三つの部分から構成されていると考えることができるだろう。まず第一が物書く人としての生であり、第二がアカデ

⁹ Lettre inédite à Jean Voilier du 3 novembre 1942, Médiathèque de Sète.

¹⁰ *Cahiers*, CNRS ; CXXVI, 1957–1961. p.705.

¹¹ *Ibid.*, p.705.

ミー・フランセーズ会員、コレージュ・ド・フランスの教授、国際連盟知的協力委員会委員（議長も務める）、地中海大学センター所長といった公人としての生であり、第三がヴォワリエとの恋愛である。ヴァレリーは上記の三つのすべてにわたって、驚くべきエネルギーで生きていく。

公人たるヴァレリーには、フランスを代表する作家ヘオマージュを捧げる役割がしばしば割り当てられたが、ヴォルテール生誕二百五十周年記念祭の講演依頼も、そうしたことの一つであった。パリ解放から3ヶ月半を経た1944年12月10日にソルボンヌ大学の大階段教室にて開催されたヴォルテール生誕二百五十周年記念祭でのヴァレリーの講演について、ミシェル・ジャルティは、「ヴィシー政権崩壊後、最初で最後にヴァレリーは、かつて両大戦下において務めていたフランス共和国の公式演説者といった役割を務めた」¹²と述べている。

この記念祭では、厳かな雰囲気の中、まずマルセイエーズが演奏され、作家のエミール・アンリオ、続いて心理学者にして教育省大臣のアンリ・ワロンが挨拶に立った。会場には、ドイツ占領下を生き延び、新たな時代へとさしかかろうとしていた市民たちが集った。

ヴァレリーは講義室に集まった聴衆たちを魅了した。この講演の好評を受け、次年度のコレージュ・ド・フランスでの講義計画を思案中であったヴァレリーは、ヴォルテールについての講義を続けていくことを秘書のモノに提案され、ヴァレリーはありがたくその提案を受け入れた。コレージュ・ド・フランスでの詩学教授の役割をヴァレリーは光栄に思っていたが、体力の衰えから講義の準備を重荷とを感じるようになっていたのであった。ちなみにコレージュ・ド・フランスとは、学問芸術への無償の愛に捧げられているとも言うべきフランス独特の国家機関であり、学位や免許などを発行することはないが、学問各分野の当代第一級の者が教鞭を執り、誰もが無料で聴講できる講義を提供する機関である。歴史ある格式高いカルチャーセンターと言えばよいだろうか。ヴォルテールの生誕二百五十周年記念講演とその延長線上のことをコレージュ・ド・フランスの新学期の講義内容にとの考えは、誠に妙案であった。

ヴァレリーがヴォルテールをコレージュ・ド・フランスでの詩学講義のテーマとしたのは、半ば偶然であり、半ば必然である。というのも、一つにはヴォルテールの生誕二百五十周年記念祭での講演の依頼が、ちょうどコレージュ・ド・フランスの新年度の講義を準備する時期に重なっていたという偶然があったの

¹² Paul Valéry *Oeuvres t.3*, La Pochothèque, Le Livre de Poche, 2016, p.1283.

は確かだが、そもそもヴォルテールの作家としての人生とヴァレリーの人生との間にはある種の相応関係があったと考えられるからである。何より「精神の自由」という理念でこの二人の作家は強く結ばれているのである。ヴァレリーは、パリ解放後ほどなくして再開されたコレージュ・ド・フランスでの詩学講義において、聴衆に向かい、時代の転換期を反映した、しかし実に洒脱なエピソードをただ差し出すことによって、この「精神の自由」という理念を示して見せているように思われる。以下に講義再開の際のヴァレリーの言葉を引用しよう。

幸いにも以前とは一変した日常のもとで、この講義を再開いたします。裏のある体制が霧消し、講義をあれやこれやしばるものもなくなりました。こうして私は、数ヶ月前にコレージュ・ド・フランスの柵の前で私を呼びとめ「これは博物館ですか」と尋ねてきた軍人に対してお答えしたことをここに繰り返すことができます。私はこう答えたのです。「これは学校です」「この学校で何を教えているのですか?」「それを説明するとあまりに長くなりましょう。ただこう申し上げます。ここは言葉が自由な館なのです。」すると軍人は私に会釈してきましたので、私も会釈を返しました。¹³

この洒脱なエピソードの披露には、コレージュ・ド・フランスというものをどのようにヴァレリーが捉えていたか、またどのような思いで教壇に立っていたのか、その一端を窺うことができるであろう。また、そのような思いの中でヴォルテールが講義のテーマとなったことに注目したい。

パリ解放の安堵と歓喜を胸にヴァレリーはコレージュ・ド・フランスの教壇に戻るが、講義は年度途中で終わることになる。1945年5月、かねてからの胃の症状の悪化により、ヴァレリーはコレージュ・ド・フランスを去ることを余儀なくされた。バラの花束を贈られた壇上のヴァレリーは聴衆に向かい、別れの挨拶をした。

コレージュ・ド・フランスの教授職を辞したヴァレリーは、主治医から絶対安静を命じられたが、「机から離れることは、自分自身から離れることだ、机なしに私は存在しない」としてヴァレリーは従わず、読み書きするための小さな机をベッドの上に据えさせた。その後、看病の都合でヴァレリーのベッドはヴァレリー家の居間に移されるが、それが彼の息果てる場となった。

¹³ Dossier Valéry du Collège de France 1944, (B.N.F. Naf 19204)

5. ヴァレリーにおけるヴォルテール像

前節においてヴァレリーのヴォルテール生誕記念二百五十周年記念講演とコレージュ・ド・フランスでのヴォルテールについての「詩学講義」について触れたが、本節においては、全テキストが残っている記念講演に焦点を当て、ヴァレリーがいかにヴォルテール像を提示しているかについて詳しく検討してみたい。

ヴァレリーは、本講演にてヴォルテールの残したテキストに直接言及するといったことはせず、何よりフランス人の魂に深く根を張るアンガジュマンの作家としてのヴォルテール像を提示しようとしている。ヴァレリーによればヴォルテールは「優れてフランス的であり、フランス以外の空、それもパリ以外の空の下はお目にかかれない」¹⁴存在だという。死後250年を阅してもなお人々の間に対照的な反応を引き起こすヴォルテールは「限りなくアクチュアルinfiniment actuel」¹⁵な存在であるとヴァレリーは主張する。決してヴァレリーは、ヴォルテールを文学史の殿堂に奉ることに終始はしないのである。事実ヴァレリーは、この講演を準備していた頃、『カイエ』に以下の通り書き記している。

状況からして、そこにおいては、私がヴォルテールについて考えたことではなく、私が言うべきだと考えたことを述べるべきなのである。ヴォルテールについて思うこと、むしろ彼について考えるであろうようなことを、思い切り自由に述べるべきなのだ。¹⁶

このようにヴァレリーは、ヴォルテール生誕二百五十周年記念講演を行うにあたって、パリ解放後直後という「現在時」を強く意識している。そしてヴォルテールが極めてactuel（アクチュアル＝現代的）であることを指摘した上で、

¹⁴ *Op.cit.*, Paul Valéry, *Oeuvres t.3*, p.1286.周知の通り、ヴォルテールは、資本主義の展開の上ではフランスの先を行っていたイギリス社会をつぶさに体験・観察する機会を持ち、しばしばイギリスとの比較でフランス社会の旧弊を難じていた。ヴァレリーのこの引用の言葉は、ヴォルテール自身の持っている気質や文体といったものが優れてフランス的であり、パリジャン的である、と指摘しようとしているものと考えられる。2016年7月26日、ウィーン大学で開催された国際比較文学会第21回大会にて、本論文と一部内容の重なる口頭発表（Paul Valéry dans ses derniers jours : au miroir de Voltaire）を行った際、引用のヴァレリーの文章のニュアンスについて、アンヌ・ヴェヌスマン女史より質問があり、筆者は上記のとおり返答した。ヴェヌスマン女史の質問により、作家の体験の場より、気質と文体にもつばら着目するヴァレリーの関心のありように気付かされた。

¹⁵ *Ibid.*, p.1286.

¹⁶ *Op.cit.*, Paul Valéry, *Cahiers*, CNRS, XXIX p.315.

ヴォルテールを「「古典主義者」というきわめてフランス的なあの名高く絶対的な概念の発明者」であると定義し直し、「精神の自由」を体現する存在として描き出している。ヴァレリーの講演の中で、ヴォルテールはアクチュアルでありつつ古典主義者でもある存在として打ち出されている。歴史の転換期の熱気の中で、アクチュアルであり、古典主義者であり、精神の自由を体現する存在、という一見並立不可能に思われるかのような概念が縊り合わされているのである。むしろ、「現代的＝アクチュアル」actuelという言葉、「古典主義」classicismeという言葉、「精神の自由」liberté de l'espritの概念そのものの再検討を迫られているようでもある。ヴァレリーの並々ならぬ力業の現われた講演であるといえよう。

この講演においても繰り替えされる「精神の自由」とは、国際連盟の下部組織である知的協力委員会の議長をも務めたヴァレリーにとって、何を措いても擁護すべき価値であった。ヴァレリーは記念講演の中でこう述べている。

ヴォルテールの最も恒常的で絶対的な情熱は、精神の自由への情熱であった。¹⁷

パリ解放からほどない時期に、18世紀の偉人を顕彰しつつ「精神の自由」の概念を提示することが、聴衆に格別の感銘を与えたであろうことは、容易に想像されよう。ちなみに、パリ解放後、いち早く8月26日のフィガロ紙にヴァレリーが寄稿した小文「息をつく」« Respier »には、以下のように記されている。

自由とは、一つの感覚である。それは息がつけるという感覚である。自由であるという思いが、今この瞬間の未来を膨らませる。その思いが我々の胸一杯に何とも知れぬ内なる翼を広げ、陶酔的な飛翔力で、我々を奮い立たせるのである。¹⁸

上記の文章には、精神の自由というものが、身体感覚に根ざした言語で表現されている。まさに「息を詰めて」暮らしていたドイツ占領下の日々からパリ解放への、身体感覚の変容の描写という形で、ヴァレリーは喜びを言葉にし

¹⁷ Paul Valéry *Oeuvres t.3*, p.1285.

¹⁸ Paul Valéry, *Vues*, éd pp.397-399. Le Figaro Le 26 août 1944.

ている。それから3ヶ月半後を経て、ヴォルテール生誕二百五十周年記念祭での講演において、この自由の概念はもはや単なる感覚として提示されているのではない。「精神の」自由という形容により、むしろ確固とした意志で選び取るべき何ものかとしての「自由」が提示されている。

このようにしてヴァレリーは、アクチュアルかつ精神の自由を擁護する古典主義者としてのヴォルテールという像を鮮明に聴衆に打ち出して見せている。さらにヴァレリーは行動する人としてのヴォルテールに照準を当てている。ヴォルテールがカラス事件などの冤罪事件の被害者擁護に努め、訴訟や嘆願のために多くのインクを費やしていた人生の最後の三分の一にあたる時期をヴァレリーがことに高く評価しているのは興味深い。ヴァレリーは記念講演において次のように述べている。

もし、ヴォルテールが六十歳で亡くなっていたなら、現在ではほとんど忘れられてしまっていたでしょうし、我々がここにきて『メロープ』や『ザイール』の作家たる彼にオマージュを捧げたりなどしなかったことでしょう。¹⁹

いわゆる「作品」を残した人としてのヴォルテール、啓蒙思想家としてのヴォルテールの重要性を否定することは考え難いことであるが、ヴァレリーは、「作品」を作る人としてより、当時の社会の中で、卑劣な者たちや不寛容な者たちに対峙し、自由を求める真性なる闘争者として生きたヴォルテールを高く評価しているのである。このようなヴァレリーのヴォルテール像は、ドイツ占領下であってナチスの役人と折衝したり、詩人のルイ・マンダンの恩赦を求める手紙を認めたり、アカデミー・フランセーズやペン・クラブにおいて戦後のいわゆる粛清や名誉回復の問題にもコミットしたりした自身の経験が反映していると考えられる。「作品」としてテキストが受容される経験以上に、非常時下において、消費したインクが実際に人の命運を左右してしまうという経験は、ヴァレリーにとって強烈なものであったのではないだろうか。

記念祭での講演においてヴァレリーは「巨大ヴォルテール」像とその可能性を喚起しつつ、同時代と、同時代の世界の悲惨とに対峙しようとしている。ヴァレリーは渾身の力で次のように聴衆に呼びかける。

¹⁹ *Op.cit.*, Paul Valéry *Oeuvres t.3*, p.1285.

今日ヴォルテールはどこにいるのでしょうか。湧きあがろうとしている声は、今日、どこに聞こえるのでしょうか。盗みゆえの殺人に比べたら、桁外れに大きな、地球規模の大罪を告発し、呪い、呑み込むためには、戦火に包まれた世界につりあうだけの、いかなる巨大ヴォルテールが必要なのでしょうか。²⁰

ヴァレリーはヴォルテールを顕揚しつつも、自らの時代の巨悪に対峙するには、ヴォルテール以上の存在＝巨大ヴォルテールが必要とされるのだ、と説いているのである。むしろ、ヴォルテールの顕揚がこの講演の最終目的なのではなく、時代の愚行にいかに抗するか、思考する個人として何ができるか、の問いがこの講演では浮上してくる。さらにヴァレリーはヴォルテールのような優れた個人の存在の必要性について以下のように述べている。

人間を単調な動物的条件から区別し、いささかなりとも人間をそうした条件から引き上げるものは、もっぱら限られた数の個人に関わることであり、ちょうどわれわれが生きる糧を農民に負っているように、われわれは少数の個人に思考すべきことを負っているのです。²¹

記念講演全体としてヴァレリーは、アンガジュマンの作家ヴォルテールを最大限に顕彰しつつ、18世紀とは比べ物にならないほど構造的で巨大な悪を生んだ現代、死をも数でしか捉えられなくなった現代の問題の手に負えなさを示し、それでも思考する少数の個人が人類の導きとなるとの希望を語ろうとしている。

本講演についてミシェル・ジャルティは「第二次世界大戦の悲劇的総括」であり「ヴァレリー自身が15年にわたり、国際連盟の枠組みの中で擁護し続けてきたあの精神の政治の失敗を認めるもの」であると述べている²²が、現代の巨悪につりあうだけの巨大ヴォルテールを求め訴えているヴァレリーは、言論・思想が社会に及ぼす力そのものについては強く肯定していると考えることができるであろう。

²⁰ *Ibid.*, p.1298.

²¹ *Ibid.*, p.1298.

²² *Ibid.*, p.1189.

6. 最期のヴァレリー

1945年5月、コレージュ・ド・フランス教授のポストを去ったヴァレリーは、自宅療養の身となる。いよいよヴァレリーの病状は進んだ。夫の看病に努めていた妻のジャンニーは信仰篤く、夫がカトリック教会の平穩の中で生涯を終えて欲しいとの思いを隠さなかった。しかしヴァレリーのカトリシズムに対する態度は、息を引き取るまで微妙なものであった。ヴァレリーは決してカトリック的な神の存在を認めようとはしなかったのである。ミシェル・ジャルティは、修道女であり、ヴァレリーの終末期に看護婦として付き添ったクレール・ヴァニエの談話を起したテキストを読み解きつつ²³、二人の間の会話を評伝の最終章（57章）に見事に再現している。信仰に関するヴァレリーの態度がつぶさに描かれているので、少々長くなるが、以下にその箇所を引用しよう。

二日目の晩は、修道女がこれまでの看護婦に代わって、すべての面倒をみたが、呼ばれたのは呼び鈴ではなく、叫び声によってだった。ヴァレリーは枕の上に置きあがっていて、目には苦悶の色が浮かんでいた。修道女が入って来たことで、ヴァレリーは急速に気持ちを静め、穏やかになった声でこう言った。

「私の人生は終わりです。私はそう感じています。終わりです。眼前にあるのは壁です。虚空です。すべてが闇です」ヴァレリーは修道女の手を取り、修道女はヴァレリーに問いかけた。あなたは神が存在しないと確信できますか？「いいえ、できません。私にはわかりません。」修道女は言う、論証によって神を見出すことはできません。しかし、イエス・キリストを知ろうとすることはできます。それに虚空に身を躍らせるような印象を持ったとしても、勇気を持ってあえて一步踏み出さなければならない時があるのではないのでしょうか、と。「何をおっしゃりたいのですか？」そこで彼女はヴァレリーに、あなたが一貫して保持してきた知的誠実さは、次のような呼びかけを発することと矛盾しないと思いますと言った。「もしあなたが本当に存在するなら、神よ、私に光を、私に力をお授け下さい。」ヴァレリーは長い沈黙のあと何度も言った。「そうだ、おそらく、おそらく」そして

²³ ジャルティは、評伝のこの部分に関し、1971年5月6日にヴァニエがモンペリエでおこなった談話を起した未完のテキスト（Claire Vannier, *Les Derniers jours de Paul Valéry*）に依拠している旨、評伝の注記に記している。

ヴァレリーは寝入った。

三日目の晩、二人が病人と看護婦との関係は素朴な信頼関係に裏打ちされて成立するものだという話をしたとき、神に出会うために必要なものもそうした素朴な信頼関係ではないでしょうかと修道女に聞かれ、ヴァレリーは答えている。「そうです、神の国が約束されているのは子どもたちに対してです。」この言葉によって、病人が「無償の贈り物を受け取った、無邪気な子どもの時代に神を前にしたときのような、新たな生のいくばくかを受け取った」とか思うのは、修道女の思い過ごしである。ヴァレリーが言ったことは、二十六年前にアンリ・ゲオンに打ち明けていた神との距離を物語るものだからである。「思考を意識することは私の想像力を超える」。²⁴

体力が衰え、意識も遠のくこともある中で、ヴァレリーは残されたわずかな気力を振り絞って修道女ヴァニエの問いかけに答えている。これは、ヴァレリーにとってのぎりぎりの誠実さである。ヴァニエとしても、アカデミー・フランセーズ会員である国民的大詩人、知識人であるヴァレリー、しかもカトリックに対して批判的距離を保っているヴァレリーの許に赴き、カトリック信者として死出するよう立ち会うというのは、大変困難なミッションであると映っていたに違いない。ヴァレリーは修道女に対しての礼節を失わない範囲で、NonをNonとしてつきつけている。若き頃のヴァレリーはカトリックの美的側面に惹かれるところもあり、それは彼の若書きの詩などにも反映しているが、何といっても1892年の「曖昧なるものとの決別」というジェノヴァの夜の決意、知的転向の後、ヴァレリーはカトリックの枠組みを出発点とせず、自分なりの「神」「神的なるもの」を求めて、長い探求を行っていたのであり、それはギリシャ文字のθ（神を意味するギリシャ語の最初の文字）を符牒として、ヴァレリーの考察の一つの問題系をなしていた。「私の中の最も宗教的なものは、非宗教的なものである」との言葉をヴァレリーは残しており、既存の宗教の枠組みとは独立にヴァレリーなりの聖性の探求を行った私密的な記録が未公開の文書の中に見出される²⁵。そうした息長く険しい彼の探求のことを思えば、カトリックの修道女の語ることとしては至極真つ当な言葉に対しても、留保含みで対応するほかなかったヴァレリーの内面を推し量ることはできよう。

²⁴ Michel Jarrety, *Paul Valéry*, pp.1202-1203.

²⁵ 特にこの問題については拙論「対話篇〈神的ナル事柄ニツイテ〉の企図をめぐって」(静岡大学人文学部『人文論集』、2008年)を参照のこと。

わずかに残された気力を振り絞っての、修道女への抵抗の跡は、我々にある種の感銘を与える。既存宗教に対するこのような峻厳な態度は、理神論から出発し、リスボンの大地震の悲惨さに衝撃を受け、無神論へと傾いていったヴォルテールを思い起こさせる。ヴァレリーが病床にまで持ち込んだ書物がヴォルテールの著作であったことは、ヴォルテールがヴァレリーの宗教的なスタンスとある種の共通性を持った作家であったことも理由の一つではないだろうか。

7. 国葬

1945年7月20日、医師や家族、友人の支え、そしてシャルル・ド・ゴールの計らいによりアメリカから取り寄せられたペニシリンの注射の甲斐も虚しく、ヴァレリーは亡くなった。訃報に接したド・ゴールは、すぐさまヴァレリーを国葬に付すことを決定した。それは、パリ解放後1年近くとはいえ、まだ脆弱であったフランスの国家としての一体性を、荘厳なる儀式によってより強固なものたらしめたいとの願いからであったといえよう。

パリ解放後直後、ヴァレリーは友人の医師ヴァレリー＝ラドに向け、「ついに我々は一人の人物を得た。これだけ空白が続いたあとで、これは大層なことだ!」²⁶とド・ゴールについて書いていたし、またエレーヌ・ヴァカレスコに対しては「ド・ゴール演ずる〈聖史劇〉に魅せられています」²⁷と語っていた。ド・ゴールは8月25日のパリ入城後間もなく、9月4日に、本拠としていた陸軍省での晩餐会にヴァレリーを招いている。ヴァレリーはド・ゴールについて「彼の人物と、軍人および政治家としての一面を、きちんと化学分析するのは難しい。しかしながら、彼には極めて複雑な局面のゲームにコミットした人間特有の集中力があるように思われる。現在の局面においては多くのカードを持っている」²⁸との印象を『カイエ』に綴っている。ド・ゴールは、レジスタンスの詩人たちによる作品の朗読会にヴァレリーを招き、ボックス席で並んで鑑賞したり、『若きパルク』の恵贈に対し、素早くヴァレリーに礼状を返したりしていた。このように二人の間には、ある種の精神的な共鳴のようなものがあったと考えられる。ヴァレリーが国葬に付されたのも、ヴァレリーへの国民的と言える評価の高さもさることながら、ド・ゴール自身のヴァレリーへの思いも反映されていると見るべきであろう。

²⁶ *Paul Valéry vivant*, p.101.

²⁷ *Hélène Vacaresco une grande européenne*, p.168.

²⁸ *Paul Valéry, Cahiers*, XXIX, 11-12.

ヴァレリーの国葬は、歴史建造物関連主任建築家であるアンドレ・ヴァントルが指揮を執り、葬儀の当日はパリの街の明かりが消され、二つの巨大な投光機によって、ヴァレリーの頭文字であるVの字がトロカデロ宮殿を背景に浮かび上がるなど、壮麗な演出がなされた。葬儀の弔辞においてアカデミー・フランセーズ終身理事は、ヴォルテールにフランス精神の典型を見ていたヴァレリーに倣い、「創造性的美徳」と「我々フランス人にとって格別に基調なもう一つ的美徳」すなわち「すべてを判断し」「すべてを理解し」ここぞというときに「空を見て」「自分の位置を測定するために」「六分儀を掴む」美徳を備えた師のひとりであったと讃えた。続いて読まれた教育省大臣による弔辞を、以下に引用しよう。

フランスは、ヴァレリーの中にみずからの姿を見えています。(中略) なぜなら、フランスは今、苦悩のどん底にあっても、勝利の陶酔の中にあっても、あるいは苦渋に満ちた国力回復への道のさなかにあっても、つねに良心の声に耳を傾け、知性の光でわが身を照らし続けねばならないことを、かつてないほど痛切に感じているからです。²⁹

このようにヴァレリーは、フランスが戦禍から甦り、新時代へと舵を切っていくにあたって、道標となるべき存在として捉えられているのである。

おわりに

ヴァレリーはヴォルテールに「精神の自由」を体現する「人」を見て、その存在を寿いだ。作品よりも作品を生ましめる能力をこそ重要なものと見たヴァレリーに、ヴォルテールの存在が晩年に至って非常に近いものとして現われてきたことにはある種の必然性があるように思われる。

ヴォルテールの中に優れてフランス的な人物像と精神の自由のシンボルを見ていたヴァレリーは、自身がパリ解放後のフランスの文化的・政治的アイコンと化したと言える。ド・ゴールによるヴァレリーの国葬は、文学と政治が交わるところに生まれた一文化現象である。己れの精神的・知的鍛錬を何より大切にし、他者に対して力をふるうことより、一貫して己れの潜在的な力を蓄える

²⁹ ヴアレリーの国葬の際の弔辞は1945年、国民教育省公報付録に掲載されている。(Le supplément au n° 48 du *Bulletin Officiel* du ministère de l'Éducation nationale.)

ことに真剣であったヴァレリーが、人生の節目節目の他者の介入によって社会的な存在としての役割を与えられ、その役割を忠実に果たしていくうち、共同体から最大限の敬意を払われる存在となっていく、その道筋は誠に稀有のものである。

ヴァレリーの言うとおりの、まさしくヴァレリーの人生とは他者の作った（ヴァレリー一人では作りえなかった）人生であったのである。こうした人生を生んだフランスの同時代の社会の豊かさを改めて認識させられる。広く、社会における文学の存在意義という問題を考えるにあたっても、ヴァレリーのテキストと人生は多くのことを教えてくれるように思われる。